

都をどりの舞台裏 (58・3・18)

阪倉 篤義 (昭13・文甲)

御紹介を頂きました阪倉篤義と申します。昭和十三年の文甲の卒業でございます。先輩方がたくさんお見えになっておりまして、後輩として甚だお話が致しにくいのでありますが、前回の福井さんのお話とちがいがいまして、今日私のお話致しますのは、何の役にも立ちません事で、わざわざお越し頂いて誠に恐縮千万という感じが致します。先程前田さんの御紹介にありました様に、本年度の集りは今日が最後になっておりますので、最後に肩の凝らない話をせよとの森先輩・田畑先輩からの御命令を、ようお断りをしませんでお引受けしてしまいました。芝居の千秋楽に、よくふざけた事を致しますが、今日は本年度の千秋楽ですので、他愛のない話を申し上げますけれども一つ御容赦を願いたいと思います。

やがて十数日致しますと、「都をどり」が始まりますので、「都をどり」の舞台裏ではこういう事を致しますという様な事をお話したいと思えます。「都をどり」の話を三高会館の集りでいたし

ますについては、その理由がちょっと見つけにくいようなのですが、「都をどり」は、三高と、多少のこじつけを致しますと、案外関係がいろいろございます。

まず、随分長い間、猪熊兼繁先生、大正十四年の御卒業だと思えますけれど、大先輩の猪熊先生がこの都をどりの作詞・構成という事をなさってきた事はご承知の通りです。猪熊先生がお亡くなりになりましたので、急にピンチヒッターが必要だと言う事で、私などの所にお話が廻ってまいりました様な次第なのであります。実を申しますと、私は最初は固辞いたしました。私など到底その任ではございませんという事を度々申したのですが、とにかくやれという事でお引き受けざるを得なかつた次第です。

「都をどり」の舞台裏でどんな事が行われているかという事を私はそれまで全然存じませんでした。昔のことを申しますと、作詞、つまり歌詞を作りますのは、以前、吉井勇とか谷崎潤一郎とか、所謂作家がされた事もあります。そういう時にも猪熊先生は構成・時代考証はなさっていた様ですが、私は作詞だけをすればよいのだと思って引受けたのです。が、実はそうではなくて、今年はどういう主題で、場所は何処を使って、どういう舞台構成にするかという事から考える、それが仕事なのだという事を知りまして、これはいよいよ大変な事になったと思いました。私人の知恵では到底及びませんので、宗政五十緒君という、竜谷大学の教授をしておりますが三高卒業ではなくて、新制の卒業生で私の教之子でありますが、この宗政君の知恵も借りるといふ事

に致しました。今まで猪熊先生一人でやられた所を二人でなんとかお茶を濁そうという訳です。しかし、心配なのは、よく冷かされるのですけれど、「お前、一体祇園の事よう知ってるのか」という点であります。私は全く無粋な人間でございます。それは親父の事を考えて頂ければ分ると思います。ああいう堅物の息子にそんな粋すくな人間が生れるはずがありません。その点猪熊先生はなか／＼粋人でありました様で、祇園へもよくおいでになった様です。猪熊先生のお父さんの猪熊淺麿という方がやはり以前に「都をどり」の作詞をなさっていたようですが、この方も多分粋人であつたのだと思います。とにかくそういう事で、猪熊先生は正に適任であつたと思つてますが、私などはおよそ色街の事を存じませんので、そんな人間が「都をどり」という祇園の顔とでもいっていい行事に参加する事がおかしいと自分では重々感じる次第でございます。けれども、お引き受けた以上はやらざるを得ないという事でなんとかやっております。もしも、ずっと「都をどり」を御覧いただいている方がいらつしやいまして、「あそこはいかん、ここはいかん」とお叱りを頂けたらと思ひまして、そういう機会に利用させて頂きたいと思つて、今日は、お引き受けた次第でございます。

今年は何れも八景でございます。大体「都をどり」というのは七・八景で構成されるのが慣例になつていまして、その中に総踊というのと別踊というのを分けておる訳です。後にも申します様に、別踊というのは後になつて加わつたもので、初めは総踊だけだったので、総踊というの

は、舞妓が数人出て揃いの衣装で踊るといふ形式ですが、それだけでは変化がないといふので後に別踊といふのが入りました。別踊といふのは、役柄の扮装をしまして、あるストーリーがあり、これを舞と所作で演じるといふ形式になっています。

総踊の方は、私は、歌詞だけ作ればよろしい訳でして、それに長唄なり地唄なりの節をつけ、それに合せて舞妓が踊るといふ訳ですが、別踊の方は芝居にならざるを得ない点があります。ところが台詞セリふといふものは、「都をどり」では全く使えない。台詞にあたるものは、チョボか、うたで代弁して貰う外はない、といふ困難があります。これは、文楽もそうでありますけれど、大変難しい。浄瑠璃の様に一つの長い筋がある話なら、まだよろしいのですけれど、わずか一〇分ほどのその場一景だけで、ある筋を展開して行かなくてはならぬといふ事になりますと、台詞がないといふ事は実に困る事です。これが、実際にやってみて初めて大変な事だと気づいた点の一つです。

それから、全体的に芝居がかつた事はやってくれるな、といふのが祇園の方針です。京都でも最近「何々おどり」といふのが、各花街で行なわれていますが、これは台詞も使いますし、かなり芝居もいたします。何景かを続けて行つて一つの芝居の筋を組み立てるといふ様にしてあります。「都をどり」は、絶対にそれをしないで、一景ごとに独立であります、しかもその中にある筋を仕組むといふ、これはちよつと無理な注文だと思つたのですけれど、しかしそれをやらざる

をえない訳です。

もう一つ、多少のストーリーを作るという事になりますと、どうしても年寄りも出てくれば汚れ役も出てくるというふうにしないと話にならない場合が多い訳です。ところが「老け役なんかは真平御免」というのが芸者さんの意向なのです。お爺さん・お婆さんなんかになるのはいやだ、ということになると、それをみな若くしてしまわなければならない。話の上では年寄りの筈なんだけれども舞台に出てくる時には若い優男で出てくると、こうなりますと話にならない訳なんです。役者さんがいやだと言うなら、しかたがない。そこでなんとか話になるように役柄を変えなければならぬ、という様な点がござります。実際にやってみて、なる程これは難しいもんだなあとは痛感しました。

そもそも「都をどり」というのは、「をどり」と申しますが、舞いなのです。女紅場にようばという芸妓学校があります。あの女紅場は、色々な一般教養もやっていますが、しかし中心は芸の研究・練習であります。「都をどり」はその発表会という気持なのです。今までやってきた舞いの稽古、その他音曲類の稽古、そういうものの一年間の総ざらえをして皆様に見て頂くという意味が強い様です。したがって、どの場面も舞いが中心なのです。そういう立場でストーリーも作らなければならぬし、実際の構成・演出もやっていかなければならないという事でありませう。ところで、これは皆様に改めて申し上げる必要もないかと思いますが、「舞い」と「踊り」とは根本的に違い

ます。

踊りと舞いとは、ときどき同じ様に考えられています。英語にしますと、どちらもダンスということになるでしょう。ところでちよつと講義口調になるのをお許し願いたいのですが、平安時代の前期頃に来ました『新撰字鏡』という漢字の辞書がありますが、その辞書には一つ／＼漢字に訓がついています。つまり、この漢字は日本でどういうふうに訓むか、という事が万葉仮名で書いてある訳です。たとえば「躑」という字が掲げてあつて、これは「越」「躑」と同じ意味だと、まずそう書いてありまして、そして、この字は日本語では「コエル」また「ヲドル」と読むのだと書いてあります。これの、我々の利用の仕方としては、逆に訓の日本語の古い意味を漢字から推定することができるわけで、「コエル」の意味は、ハードルを跳び越えたりするときの「越える」で我々はよく知っていますが、同じ字がまた、「ヲドル」とも訓まれる（翻訳される）という事は、つまりヲドルという言葉は、コエルという言葉と意味が通じ合ったという事ですね。つまりヲドルというのは物を飛びこす動作のように、ピョイと飛び上ることを意味した様です。

それに対してマフというのは、「目がまう」というように「回わる」の意味で、マフという言葉の名詞が「マヒ」ですから、「マヒ」というのは、要するにぐる／＼と回わる事です。ただ回わっているだけではつまらないので、手を上げたり、下ろしたりして回う訳です。つまりマフとヲドルの違いは、根本的に申しますと、水平の動きが舞いで、垂直の動作が踊りなのです。ピョイ

ピョイと跳ね上がる動作を踊るといふ。料理でいう「鯛のおどり」というのもピョンと跳ね上がるやつを食べるわけです。「踊り上がる」といふと、喜んで飛び上がる事になりますが、「舞い上がる」といふとグルグルと旋回しながら上に上がって行く事です。

この「舞い」と「踊り」とは色々な意味で対立いたします。つまり地域的に申せば、上方は舞いで、関東は踊りです。これは関東の踊りの会など御覧になった方は御承知かと思ひますけれども、どうも騒々しい感じですね。我々の舞いを見慣れた目からは、関東の踊りは大変動作が激しい。それに比べますと関西の舞いというのは非常に静かです。静かであるという事は、ある意味では上品だという事でもあります。したがって、関西の舞いというのは貴族的、これに對しまして踊りというのは庶民的、という様に多少割り切つて申せば申す事も出来る訳です。

地域的に申せば関西と関東の違い、内容的に申せば貴族的と庶民的の違い、時代的に申しますと貴族文化が中心の時代には舞いが盛んで、庶民的な文化が興つてまいりますと踊りが盛んになってきます。

ですから、中世頃から以後に「何々をどり」といわれるものが急に増えてくる訳です。その中の一つが「歌舞伎踊り」です。派手な、今で言えぱつぱつ、格好をする事を「カブク」と申しました。カブク様な踊り方を歌舞伎踊りといつて、阿国あくにのはじめた歌舞伎踊りは、派手な、世間の常識をはずれた様なパフォーマンスだった訳です。ですから風俗を乱すといふ事で、やがて

禁止されてしまう事になります。そういう様に「踊り」と「舞い」というのは基本的に違いますから、その違いを考えますと、「都をどり」と呼んでいます。があれは本当は「都舞い」でして、決してヲドリではない訳です。それが根本的に「都をどり」の性格を決定しているといつてよろしいかと思えます。

アンドレ・マルローという有名な作家が来たとき、関東で「踊り」を見て関西で「舞い」を見たんだそうですが、その時に彼は「舞い」の方は内化的であり「踊り」の方は外化的であるという言い方をしたそうです。その意味は要するに「舞い」というのは力を内の方へ内の方へと向けて行くやり方をする。それに対して「踊り」というのはむしろ外に発散するやり方だ、というふうに感じたというのですが、やはりマルローだけあって正確に見ていると言えます。そういう舞いが「都をどり」の根本になっております。

さて、この「都をどり」が京舞の井上流という流派と何故結びついたのか。大体、この「都をどり」だけじゃなくて、祇園は、他の花街と違ひまして、井上流の京舞と結びついて離れないくらい密接な関係にあります。これにはどういう事情があったかという事を簡単に申し上げます。御承知の通り京都の舞いには色々な流派があります。井上流の外に例えば篠塚流・東間流・山岸流その他いくつかあります。祇園の舞いは、もと篠塚流であったのです。井上流の初代の頃は祇園とは結びつかないで終りました。この初代井上八千代は明和四年（一七六七）の生れで、儒

者の妹だったといひます。八十七才という長生きをして、安政元年（一八五四）に亡くなりましが、近衛家に仕えて、上品な御殿舞を教えたりしていました。ついで、二代目の井上八千代、これは初代の姪にあたる人なのですが、天明元年（一七八一）の生れで、祇園町に住む事になったのですが、この人は能の金剛流が好きで、金剛流の舞の手振りはかなり舞の中に取り入れたりいたします。今年度の演目の中に「土蜘蛛」というのを一つ入れたのですが、蜘蛛の精が現われて頼光に糸を吹きつける訳です。細いテープをパーツと散らす様にして投げ掛ける、これが舞台としては大変面白いのですが、能でこの演出を始めたのが金剛流で、大体、金剛流の能というのはやや派手な演技をいたします。二代目は、そういう所を京舞に取り入れるという事をしました。一般に能がかつた舞を本行舞ほんぎょうと呼んでおります。この二代目は明治元年（一八六八）に亡くなりました。

その次の三代目井上八千代という人が非常に大きな存在でした。この人は親世流の能楽師の片山九郎右衛門と結婚して片山春子と呼ばれています。天保九年（一八三八）の生れですが、元来は住吉神社の社家の娘だそうです。我々は祇園町の人と言いますと、みな粹いとな家の生れかと思いがちですが、こうして見てまいりますと、それぞれ堅い家の娘さんで、儒者の妹さんであったり、社家の娘さんであったり、かなり固い家の娘さんが舞のお師匠さんになっている、これは面白い事だと思ひます。片山春子という人は大変姿の美しい人で、水谷八重子が扮して「京舞」という

芝居にもなりました。この人は百一才まで長生きをしましたが、一度結婚をしてたくさん子供もあつたのだそうですが、離婚して片山九郎右衛門と再婚いたしました。この兩人の結びつきといふのは、やはり京舞にとつて大切な意味があつたと思ひます。申すまでもなく、この事によつて一層井上流が能風になつてまいります。元來が、初代以來、上品な舞だつたのですが、そこに更に能の要素がますます加わるという事になつたのです。この三代目の八千代さんが、実は「都をどり」を始めたのであります。

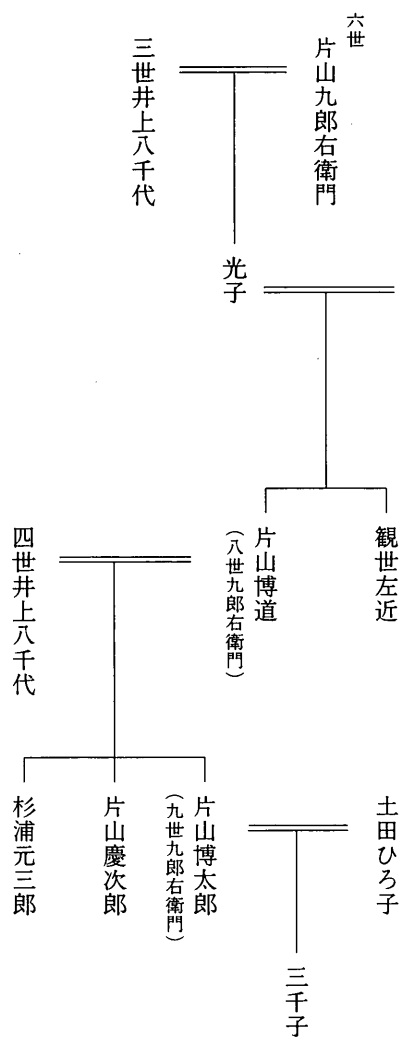
「都をどり」はどうして始まつたのかという事ではありますが、明治の五年に京都で博覧会がありました。都が東京に移りまして京都が寂れてきたので、なんとかして京都に活気を取り戻さなければならぬという事で、一つ博覧会をやらうという事を考えたのが当時の知事大参事というような人たちで、着々実行に移つたのですが、この博覧会の余興として、各色街でやっている舞いを上演したらどうだろうかという話になつた様です。その当時、京都の六花街すなわち祇園の甲部、先斗町、宮川町、祇園東、上七軒、島原、こういう色街には、夫々すでに舞が行われていた訳です。例えば下河原には東山名所踊、先斗町には鴨川踊、宮川町には宮川町踊がありました。これらを競演のかたちで、付博覧会つまり博覧会の余興として上演しようという事になつたのです。そこで、祇園はどうしようかという話になりました時に、祇園の一方の主人杉浦次郎左衛門という人、今の杉浦誠一氏からいふと曾祖父になる訳ですかね、この人が大變力を入れまして、

相談をかけたのが三代目井上八千代さんだった訳です。「こういう次第だから一つ力を貸して欲しい」と申し入れたところ、八千代さんは、「協力いたしますけれども、その代り今後、井上流以外のものは祇園とは関係を持たせないという約束をしてほしい」という、非常にはっきりした条件だったそうです。杉浦さんは「勿論そうだ。今後は祇園は井上流一本でいく」と約束をしました。「それならばやりましょう」という事で三代目八千代さんが付博覧会に上演するをどりの事を真剣に考えようという事になったのですけれども、なにしろ、一種の群舞と申しますか、沢山の舞妓が勢揃いしてをどるといふ形式が、それまでは不十分だったので、どうしたらよからうかといふ事を考えました。そのころ下河原に伊勢音頭を真似た「真葛をどり」というものがありました。一つあれを取り入れたらどうかという事になって、祇園の人達がうち揃って伊勢の古市へ「亀の子踊」というのを見学にいったそうです。伊勢音頭を謡いながら踊りを踊る、これが群舞の形式になっていまして、沢山の踊り手が花道から出てきて、舞台で入れ違って入るといふ形式なのだそうです。現在の「都をどり」で、最初の場面に、舞妓が両方の花道から出て来て真中で交錯して入っていくというやり方は、この伊勢で学んできたやり方をそのまま使っております。これは、伊勢では、元来は遊女の顔見世という意味でやっていたものだそうです。

こういう一種の集団舞踊と申しますか、そういうものをやり出したのが、そも／＼の「都をどり」の発足であります。最初、雅な京都のをどりと申す事で「雅をどり」という名前にしようか

という話があったようですが、これも三代目が「都をどり」がいいという事で、この名前が定着したといわれています。先程申しました様に付博覧会を計画したり、具体的にそれを熱心に進めたのが榎村という後の二代目の知事になった人で、第一回は榎村知事が自分で作詞をしたのです。「都をどり」が始まった時は観覧料がわずか四銭五厘、明治十年頃になりますとお茶券付

観世元義
(七世九郎右衛門)



で二十銭、踊りだけ観るなら十銭という時代だったそうですから、大分今と話が違います。場所も今の所では勿論ありませんで、花見小路の西側で夕方の五時から始まるという事になっていた。そういう形で第一回が発足いたしましたして、それからこの伝統が百一回を超える今日までズーと引き継がれてきたという訳でありまして、そういう意味では、「都をどり」は伝統尊重と申しますか、昔のやり方を守るということを非常に強調いたしております。

現在の井上流家元は四世の井上八千代さんですが、系図をしるしますと前掲のようになります。三世の井上八千代は六世の片山九郎右衛門と結婚し、その間に光子てまこという娘さんが出来ます。この光子さんが観世元義という能楽師と結婚しますが、この人は七世の九郎右衛門になります。この夫婦の間に男の子が二人ありまして、兄さんの方が観世左近という人で、比較的早く亡くなりましたが、先代の観世の宗家で注目された人です。弟にあたる人が片山博道ひろみち氏で、晩年九郎右衛門の名を継ぎまして八世九郎右衛門という事になります。この片山博道、八世九郎右衛門の奥さんが、人間国宝の今の四世八千代さんですね。ですから三世のお孫さんの奥さんが四世という関係です。この間に博太郎さん・慶次郎さん、元三郎さんと男子が三人おられます。皆さん能楽師です。博太郎さんの奥さんが、こないだこの会で話をされた昭和二十二年卒の土田君の妹（ひろ子）さんです。その娘さんの三千子さん。この方は未だ若いですが、大変に今注目されている人で、多分現家元の後を継ぐ力量の持ち主であろうといわれている人です。「都をどり」でもお

祖母さんに協力して振付などされてます。無理矢理結びつける訳ではありませんが、三高とは、そんな関係もございます。

こういう事で現在の「都をどり」は進んできた訳なのですが、昔に比べまして、時勢と申しま
すか、段々変って行かざるを得ない所があります。そこをどうするかという事を真剣に考えるべ
き時になっているのですが、何よりも大きな問題は、申すまでもなく芸者・舞妓がどん／＼減り
つつあるという事で、明治維新の直後、都をどりが始まった頃の祇園では、芸者が五六〇名、舞
妓の数が一七八名という記録があります。それから、飛んで昭和の十年頃になりますと舞妓の数
が一三〇名くらいに減っております。しかしその頃はまだ／＼盛んだった訳です。昭和三十六
／＼三十八年になりますと舞妓の数が減って五一名で、明治維新の頃に比べれば三分の一以下に減
ってしまった訳です。芸者の方も三七二名で、三分の二近くに減ってしまいました。それが更に
現在では、舞妓の数は二五名しかいません。芸者も一三八名とガタ減りしています。これでも実
は七人程増えたのです。去年の「都をどり」は、どうしても舞妓が足りませんで、素人の娘さん
を雇ってそれでやっと総踊をやった次第です。それが今年は、ちょっと持ち直しまして舞妓の数
が増えて二五名になりましたので、何とか素人を雇う事なしにやれるのですが、人数の不足がや
はり根本的な悩みでありまして、三交代で夫々の役をあてて、総踊と別踊とをやって行こうとす
ると、どうしてもスタッフが不足いたします。しかし、これはどうする事も出来ない問題で、若

い人の考え方が変わってしまったえば舞妓志願者が減ってくるのは、止むを得ない事だと思ひます。これに適應した形を考えざるを得ないというのが今後の一つの課題かと思ひます。

實際に作詞・構成をやってみまして大変驚いたことがございます。最初私にやれといつてくれたのは暑い盛りの頃でした。私がまったく素人なので準備に時間を与えないとだめだということで、早目に半年も前に依頼にこられたのだろうと、私は最初そう思つてました。ところがそうではなくて、四月にやる都をどりの準備は、すでに前年の八月頃から始まるのが普通なのです。だから一年の内八ヶ月程を都をどりにかけている勘定になります。

来年はどういうテーマでいこうか、という相談が八月頃から始まりまして、何処のお寺に何年の年忌があるとか、歴史上の事件の何年目に当るとかという事を調べまして、何かそれに関連のあるものを出せないかという様な相談をいたします。それとまた、慣例として、四季の順を追つて京都の名所を出すことになっています。今年は何処を出したから来年は何処、ということを考えてはならない。こういう話を八月頃からぼつぼつ始めまして、あれこれ現場を見に行つたりしている内に九月になります。九月の中頃までに、大体こういう筋で、ここを使つてやろうという事になり、九月の終り頃から作詞にかかりますが、勉強の余暇を見てやることですから、一ヶ月から一ヶ月半はどうしてもかかる訳で、完成は十一月頃になつてしまいます。出来た歌詞の原案を、今度は長唄なり常磐津なりのお師匠さんに見せて節付けをして貰うのですが、我々が考え

た文句通りでは、うまく節がつかない事もあります。この文句は困るとか、ここが長すぎるとかダメが出て、そこで又手直しするという様な事で、節付けに十二月いっぱいかかります。

重なる様にして井上八千代さんがお弟子さん達を使って振りを付けられるのですが、それが一ヶ月ぐらいかかって、二月頃からそろそろ実際の稽古が始まります。三月になりますと、衣装はつけませんが普通の着物のままで、別踊は別踊、総踊は総踊で舞台の上で稽古をつづけ、そこではじめて、今年はこの三月二十四日に実際に衣装をつけて上演の順序でやってみるということになります。実は、その前の段階で、衣装を決めなければならないという大切な仕事があります。これは、なかなか難物でありまして、衣裳の事はどうもよく分りません。時代考証をし、有職に従って正確を期そうとしても、舞台効果を考えて、敢て変更しなければならぬというよきな事も度々起ります。芸妓衆の希望も、ある程度は聴かなければなりません。高島屋とか大丸とかが、どういう生地でどういう模様にしましょうか、染めにしましょうか、縫いにしましょうかなどと言ってくる訳ですが、それに返事をしなくてはならないのです。我々が言った通りに作ってみると全然感じが出ないという様な事もありまして、それはキャンセルして作り直しという事になります。あちこちで「何々をどり」が行われますが、正直言いました、都をどりほど衣裳に金をかけている所はないのです。古い衣装を再度使うという事はいたしません。一ヶ月間の舞台の上で、一日に四回あるいは五回使いますと、裾がほつれてしまつて使い物にならない状態に

なります。今年の衣装代は五千万円ぐらいだと聞いています。二月の中旬に新聞に記事が出ます頃には、ほぼ衣装が揃って宣伝用の写真撮影という段取りになる訳ですが、更にそれから連日猛稽古がありましてやっと初日をむかえるという事になります。八ヶ月程の間、まあ何かこの準備にかかっているという訳です。これは私は全然予想しなかった事で、こんな事なら引き受けるんじゃないかと思うくらい、何か、しょっちゅう頭の隅にこの「都をどり」のことがひっかかっています。楽しいと言えは楽しいのですが、責任がありますのでかなり消耗もいたします。

こうして、まあ一応上演という所へ行くのですが、始まってからも、実際舞台でやっていると、どうもここが良くないという事で、部分的に手直しをする事もあります。しかし、大体の所は初日が開けば変らないという事で、まずホツとして過せる訳です。ただ以上のような色々な制約があります中でなんとかやっていかなくはならないという事で、どうも我ながら気の利いた物が毎年出来ないのを残念に思っております。

では最後に、今年はこんな事をいたしますという事をお話いたします。

一番最初に「置歌おきうた」というのがあります。これは毎年の決まりで、必ず置歌つまり序歌を、他に何もなしに銀襖だけが背景の舞台で演じます。これは、本来京舞というのは近衛家という貴族の御邸で行なわれるものであるという建前で、それを舞台の上に持って来て皆様にお見せしますという事を示すものです。

第二景が「稻荷大社初午詣」で、これは総踊ですので特別の事は致しません。舞台に稻荷神社の社頭を描きまして、この前で舞妓が手に杉を持って踊ります。この杉は昔から「しるしの杉」と申しまして、参詣する人が稻荷山の杉の枝を持って帰り、家に植えて根付くと商売繁盛するという信仰によるもので、稻荷は元来は「稻のり」で、稻がよく稔るといふ五穀豊穡を守る農耕の神だったので、中世から近世になりますと商売繁盛を祈る神社になりました。

第三景は「大津絵又平嘶」を出します。これは、浄瑠璃の「傾城反魂香」を御存じの方は御承知だと思えます。大津絵に鬼の念仏とか藤娘とか有名なものがありますが、又平が酒に酔って出かけた内に大津絵から人物がぬけ出して、例えば鷹若衆が藤娘の持ち物という様に持ち物を取り替える。又平が帰って来たのを見ると、あわてて、そのまま絵の中に飛び込む、という様な一種のコミックです。

四季の順序を追ってまいりますので、次の夏は、第四景「鴨川の錦友禅流し」。最近友禅流しが復活していますので、東山を背景にして、布を動かして友禅が流れている恰好に見せようという訳です。これはごく軽いものです。

次の第五景は、秋の初めの話といたしまして、先程申しました「土蜘蛛」をいたします。土蜘蛛は能に基いております。源頼光が館で病気で寝ている。そこへ待女が薬を持って来る。その待女が実は蜘蛛の精でありまして（これは能と少し違いますけれど）、頼光をたぶらかそうとして来

たのに頼光が気づく。それで待女の方はそのまま消えてしまふ。その後には美女が現われます。これが又蜘蛛でして、頼光の方へ近づきます。頼光が気づいて枕元にあつた名刀を取つて切りつける。そうすると女は、蜘蛛の作り物が下ってくる上にヒラリと飛び乗つて糸を吹きかける。それに対抗して頼光は遂に蜘蛛の精を切り伏せるといふ筋です。

次は第六景「愛宕山嵯峨野昼夜の色衣」で、これは愛宕山と嵯峨野を使います。愛宕山の燃える様もみじ、これは男を想っている女の気持を象徴しているといふ様に考えます。嵯峨野は、広沢の池の近くの景ですが、やはり男の来るのを待ちわびている女性を描きます。どちらも男を想う女の気持を主題としまして、これを男一人、女三人の絡みで表現いたします。これも総踊りで、複雑な筋がある訳ではありません。

次は冬の景色、第七景「清流園雪の事始め」で、二条城の清流園といふ庭園を使います。これは、どうしても観客がお座敷姿の芸者の粹な姿を見たい、といふ希望がありますので、清流園を背景にいたしました。ここで地唄舞、純粹の京舞を御覧に入れる様になっています。

構成は春から始まつて夏、秋、冬と進んで再び春に戻つてフィナーレとなる、これは決まつた構成ですので、最後に南禅寺の春の景色を出しました。第八景「価千金南禅寺の春宵」です。南禅寺を出すという意味は、今年には山門の大修理が出来まして四月に完成祝賀の法要があるそうです。それともう一つ、南禅寺の山門の西南の金地院こんちいんに住んでいました、南禅寺を再興するのに力

をつくした以心崇伝が亡くなって今年で三百五十年になります。文句もそういう事をうたい込みました。はじめ、崇伝の住んでいました金地院の庭園、八窓席とか鶴亀の庭の事をおり込みまして、そこで終ろうと思っておりました所、そこへ奥田会長から、「一一五年記念に因んで三高を入れろ」という注文の電話が参りました。これにはちよつと困りまして、南禅寺と三高とをどう結びつけたらいいかという事で、苦肉の策を弄しました。山門の横を真直に行きますと疏水に出ます。その疏水を更に北に進みますと、「哲学の道」に出ます。そこまで行きますと吉田山がやっと見えます。そういうふうに通遙したという気持で、バックをつり上げますと遙に吉田山が現れてくる事にしました。そこで、「絶景かな〜」と眺めていると「静かに照れり吉田山」という事でファイナレにしようという訳です。これは他の学校を出られた観客からは怒られる事も覚悟でやりました。私は、専ら会長の御命令でという事にして、会長に責任を押し付けましたけれど、「都をどり」に一遍「三高」を出したい出したいと思っていたのです。そうしましたら、たま〜そう言つて頂いたので、これ幸いと三高を無理矢理押し込みました。その場面が五月十四日の大会当日に再上演される予定です。吉田山の横へ歌碑のつくり物を立てるといふ計画があるそうですので大変楽しみでございます。御静聴ありがとうございます。

（甲南女子大学教授
京都大学名誉教授）